

あかつき

上林暁顕彰会
平成30年1月
事務局発行

第十三回上林暁忌短歌大会
特選に秋沢さん（黒潮町）など三名が！

昨年7月22日（土）に、「第十三回上林暁忌短歌大会」が黒潮町保健福祉センター大ホールで開かれ、県内外から60名（応募数91首）の方々の出席がありました。

大会は、午後一時開会、ただちに東京からお見えの大島史洋先生（結社「未来」選者、運営委員長）に、「歌の交差するところ」と題してご講演と作品の講評をしていただきました。次いで、上林暁賞等の入賞作品の発表が行われ、特選には秋沢香代子（黒潮町）、窪田詩都子（四万十町）、橋本生子（四万十町）の三氏の作品が選ばれました。

特選以外の入賞作品、植田馨賞一首、秀作五首、佳作十首をふくめ十九首の作品が選ばれています。

大会入賞作品

《特選》

非常用防災セット備えるもひとつ気になる
吾の萎え足 黒潮町 秋沢香代子
雑踏の一人となりて一票の格差を思ふ東京
駅に 四万十町 窪田詩都子
亡き母の懐かしき字のレシビ見て今年も漬
けし薤五キロ 四万十町 橋本生子

講師 大島史洋先生



《植田馨賞》

ほととぎすの声を聴きつつ熟れし梅八キロ余り
を塩漬けにせり
四万十市 林 明子

《秀作》

パソコンもスマホもできぬこの指がおは
じきなれば生きいき動く

高知市 坂本 瑞枝

農に嫁し農で生抜く米寿なりこの硬き手
をしみじみとみる 四万十市 宮本 操

横断歩道渡り終えたる男の子おじぎして

去る紫陽花群れて 黒潮町 谷脇 巴

収穫の辣蕪切りに励む姉昭和一桁の世代

は強し 黒潮町 渕本 幸美

夕されば野焼の煙あかあかと種蒔く時ぞ

田を耕さむ 土佐清水市 池 英夫

* 佳作十首は、紙面の都合上割愛します。

二〇一七年度・第二回文学講座

演題 『晩晩年の家族と隣人』

講師 大熊 平城 さん(上林晩・孫)

10・8(日) 13:30〜 レクチャーホール



講師の大熊さんは、最初に世田谷ピンポンズさんとギターを弾きながら「紅い花」を歌われたあと、講演に入られた。

《晩晩年の年表から》

本題に入ります。晩の晩年ということなんですが、長男の育夫が疎開から東京に戻ってくるのが1951年です。晩の他、末妹睦子、長女伊瀬子、長男育夫、次女道子の五人暮らしがその後八年間続きます。58年の12月に長男が都内に転居して結婚します。そして60年になりますと、3月に長女、それから11月に次女が結婚ということであつという間に三人の子どもが独立していなくなつてしまつて、結局晩と末妹睦子が残ります。その後時期はよ

くわかってませんけれども、睦子がガス自殺未遂を起こします。『兄の左手』に書かれているのですが、そういう問題がありました。62年の11月に今度は暁が二度目の脳溢血で倒れまして、天沼の家に長男夫婦が移り住むことになりました。長男によると11月、睦子によると翌年1月なんですけれども、睦子が精神的にちょっと厳しくなって、長男の妻嘉久子に付き添われて田舎に帰ります。そして翌年の2月に暁が退院して、そのすぐ後に睦子が上京します。これは細かいようですが、「白い屋形船」の執筆過程に関わる重要な問題なので後で詳しく話します。

そして5月に隣りの家が空いたので暁と睦子が移りまして、元の家には長男夫婦がそのまま住むという形になります。6月に父伊太郎死去、8月に「白い屋形船」発表、10月中頃に睦子が帰省し11月に母春枝と義弟野並一郎を連れてまた上京します。一郎は一週間滞在します。そして翌年の1月7日ごろ母が嘉久子に連れられて帰宅します。そしてこの年の4月長男夫婦が福岡市に転居し、長女一家が移り住みます。この時の長女一家のメンバーは、伊瀬子と夫の大熊佳平（かへいと言います）、長女暁子、そして佳平の母大熊サイです。その翌年の8月に長男である私が生まれています。そして68年に大熊サイが裾野市の佳平の兄

のところに転居しまして、69年1月に次男観平が生まれます。そして74年に川端賞を受賞しました。78年に子供が大きくなって手狭になったということで川崎市に引っ越しまして、それでまた暁と睦子だけになり、1980年の8月に亡くなりました。

〈食男育夫夫婦〉

家族と隣人ということですが、隣に住んだ親族に限らせてもらいたいと思います。長男夫婦が福岡市に転居するまで一年余り暁の面倒を見たのですが詳細は分かりません。何しろ上林自身が書いていないんです、随筆にも小説にも。ですから嘉久子などは随分働いたはずなのですが今では詳しいことは全然分かりません。このあと二人の活動としては中村の為松公園の文学碑の除幕式に春枝と八千代と共に出席しました。このときの写真がございいます。「四万十川の青き流れを忘れめや」の碑の除幕式の写真です。

これが睦子と八千代で、こちらは母春枝と育夫と嘉久子です。嘉久子は私にとって叔母ですけれども、この夫婦は子供がなかったので非常に可愛がってもらいました。私と弟が福岡に遊びに行ったときもそうだったのですが、

写真がどういいうわけが残っていないのです。私の家に、長男は徳廣端午のペンネームで『上林暁研究』に随筆を書きました。専門は地震工学で、九州大学助手、九州芸工大学助教授を経て鹿児島大学教授になりました。囲碁はアマ六段でした。嘉久子は早くに亡くなってしまっ、その後従妹の千賀子と再婚しましたが、2011年8月に亡くなりました。



チャンソンを歌う

長女伊禰子一家

今度は、長女の一家と言いますか私の家族の話になりますが、暁は長女の結婚式に出席しその様子を「迷ひ子札」に書きました。暁には三人子どもがいますけれども、長男の結婚式というのはなかったんですね。いつ結婚したかもよく分からない。次女は鹿児島に嫁いだものですから、暁の代わりに育夫夫婦が行きました。なので子どもの結婚式で出席したのはこの時だけということです。私の両親はど

ちらも高等学校の社会科の教員でした。結婚後比較的近くに住んでいたのですが、長男夫婦が福岡市に転居することが決まりますと、睦子を助けるのは長女しかないということとで嘉久子と睦子が別個に長女を訪ね、暁の隣家へ行つて助けるように要請したそうです。これを受けて当時世田谷区に住んでいた大熊家は天沼に引っ越すことになりました。長女は仕事があつたので、あまりそんなに働いたということではないのですけれども、睦子が外出する時もありますし、何度か帰省しますから、そういった時に代わりに暁の面倒をみて原稿の判読と筆記を担いました。

原稿があります。これは72年の素木しづ子遺作短編集についてのもので、題名と日付の字がありますが、これは睦子の字ではなくて長女伊禰子のもです。これはもう筆跡で分かる。夏休みですね、学校が休みのときに睦子が帰省することが多かったので、夏のことが多いです。この原稿自体はずっと大熊家に保存されていたものです。判読が終わると左手のものは捨ててしまえというふうに暁は言つたのでほとんど残ってないのですけれども、長女は暁が見てる前でくしゃくしゃにして屑籠に入れて、後で出してきて元に直して取っておいたと言ってます。

(別の原稿を見せながら) これも同じですね。

昭和49年、さっきの二年後ですけど、やはり夏です。

これは「真の達人」です。次いで「私の中の日本人」。これは天沼の睦子ところに保管されていたものです。睦子の字で「伊禰子正書」(ママ)と書いています。本文は長女の筆跡です。

その続きなんですけれども、伊禰子が清書した中にさらに暁の字で言葉が書き加えられています。本人が推敲を加えた跡があつて、これはなかなか珍しいというか、他に私は直接見たのはないです。睦子の清書に暁が手を加えたのは残っていませんがたくさんあったのかもしれない。

そういうわけで隣におりまして長女一家はいろいろ役に立ちましたし、また逆に大熊家の子供たちが小さいものですから、父方の祖母やお手伝いさんがいない時などは、睦子に預けていたのです。お互い様というわけで、大熊家と上林の家とは行き来が密接にありました。

大熊家のメンバーを個別に言いますと、暁子については「孫アキ子」、「病床日記シリーズ」に書かれています。特にこの「病床日記シリーズ」では、「文鳥を見に来た。翌日アキ子また文鳥を見に来る」という記述が随分並んでいるんです。一日に何度も来てた。それもまた毎日続いたよう

です。「(暁子の)祖母」という名前で、大熊サイも登場しています。暁子の子守の他、睦子不在時、暁の世話もしたと考えられるのですけれども、もう亡くなっているし、他に誰もいない時しか世話をしていないはずなので目撃した人がおらず、詳しいことは分かりません。

私ですけども、随筆「緑のピストル」、それから「ランドセル」に、観平は「観平君」に登場している。「緑のピストル」は、私が子供の頃おもちゃのプラスチックのピストルだと思えますけれども、それで遊んでたと、ひょっとしたら水鉄砲か何かかもしれないですね、そういう話です。「ランドセル」は、姉が小学校に入るので買ってもらったランドセルをなぜか私が背負ってやって来て暁の前で見せびらかして歩き回ったというエピソードです。今私がこうして話をしていますが、そうだったのは、まず暁の長男である育夫が亡くなり、それから睦子が現在も97歳で生きておりますけれども、認知症で訳が分からなくなってきたということで、一気に世代が交代しまして私が代わりに出てくるようになったということです。さて暁が死去した8月28日ですが、私の誕生日だったんです、15歳の。よく覚えていますが、この時には病院には私は行っていないくて、家で高校受験の勉強をしてい

たのですけれども、弟が帰って来て「おじいちゃんが亡くなった」と言うのを聞きまして、ちょっとなんか鳥肌が立ったようなことを覚えています。

暁から見た話ばかりでしたけども、私から見た話もします。私が生まれたときにはもう半身不随で寝ていましたので、会話は全然ないんです。左手で握手をするだけで、見た印象しかないんですけれども、やはり作家ですから子供をジロジロ見て観察するんですね。幼い時は全然分からなかったのですが、段々物心がついてきますと、すごい視線で見てるんですね。特に目がきれいだったっていう風に言われますけども、本当に無心にこっちをジロジロ見ていて、私の方も何か照れくさくなって目を合わせられなくなってしまうというような状況だったのを覚えています。

それから隣の家と言っても長屋みたいなところですから、隣の家で夜中に叫んでいる声が聞こえるとちょっと怖かったという思いがあります。また夜中にトイレに起きて蛍光灯の白い煌々とした光がすりガラスに映っていますと、一体何をやっているんだろうと思いました。そのぐらいしか直接のことでは話すことがないんです、残念ながら。

あと川端賞をとった時の話ですが、賞金が出たので何か買ってもらえることになりました。私はその頃出始めた電

卓を欲しいと思っていたのですが、電卓という言葉を知らなかったのので、「電子計算機が欲しい」と言ったら、睦子は驚いて「そんな高いもん買えません。何百万もするんでしょう」と答えました。こちらの欲しいものをうまく伝えられなかったので悔しい思いをしました。

結局何を買ってもらったかというと、私と弟は野球のグローブです。ちゃんとした革のグローブを買ってもらったので、それはそれで満足しましたけれども。

〈三妹 弥生〉

三妹弥生が補助した期間は長くありませんが、大事な時にいたために「極楽寺門前」「歴史の日」に描かれています。睦子は自己主張が強いタイプでしたけども、弥生は対照的におっとりとした性格だったので、好意的に見られることが多かったようです。東京にいた期間ですが、まず育夫が生まれたすぐの後八ヶ月ばかりいました。

それは「極楽寺門前」に書かれています。それから太平洋戦争が始まる時期を挟んだ１年と数ヶ月です。この時のことは「歴史の日」に書かれています。「妹」としか書かれていませんが登場するのは睦子ではなくて弥生なんです。その後暁の脳溢血以降に二度ばかり来てそれぞ

れ二ヶ月ぐらいいいました。



ピンポンズさんと
「紅い花」を歌う



糸妹 睦子

(1) 最大の功労者

いよいよ最後に睦子を取り上げます。ご存知の方もたくさんおられると思うのですが、本当に長い期間暁の創作と生活を支えました。東京にいた期間を年譜などを見て拾い上げました。(39年8月～41年5月、42年8月～45年3月、45年12月～47年7月、48年3月～80年8月)。最後の期間に何度も帰省していますが、半年以上の長いのはないので省略しました。合計約38年間ですね。

(2) 精神の不安定

暁と一緒にいた時間は長いのですが精神的な不安定が見受けられて、「去年の薔薇」という小説にはこう書かれています、1962年の正月のこと、二十年に余る間苦楽を共

にして来た妹は、四十になつて未だ独身でノイローゼに冒され、暮から蒲団をかぶつて寝たつきりである。「自分が手塩にかけて育てた甥や姪に先を越されたことは、妹にとつては悲劇で、そのためノイローゼは募るらしい。」睦子が29歳の時(1949年)のことを暁は既に「聖書とアドルム」という小説に書いています。今では29歳で女性が結婚してなくても不思議ではないんですけど、その頃はオールドミスと言われていた、それで睦子も気にして聖書やアドルムという睡眠薬、そういったものに逃避していたという話です。実際暁が思っていたほどひどく悩んではいなくて、取り越し苦労だったようです。けれども、やはりそういうことを内心で気にしていたのでしょう。暁の子供たちがあつたという間にいなくなつて、それで取り残されたつていう気分になつたらしいのです。そして暁は暁で、親しい女性と出かけたりしていましたが、睦子は本当に一人だけになつてしまい、服飾デザイナーとしてやっていこうと思つて知り合いのデパートの重役に頼んだんですが、洋裁学校を出てからずいぶん経つてますので、習ったことは古くて通用しないと言われ、もうどうしようもなくなつてガス自殺を図つたということです。その辺りのことが『兄の左手』に書かれ

ています。病院でいろんな注射を受けたせいでその頃の記憶が一切なくなってしまったといえます。それがまだ完治しないうちに、暁の脳溢血という状況になってそれで田舎に連れて帰られたということです。63年2月に暁の面倒を見たいと懇願して上京しました。

1963年2月1日に育夫に手紙を書いているのですが、重要と思うところを読みます。『今日は育夫にお願いがあつてペンを取りました。私事此方にあれば安らかな日があるかと思つておりましたが、苦しい苦しい毎日を過ごしてゐます。これからの事が不安で胸は張りさけんばかりに苦しく夜はねむれない日が続いてゐます。『中略』それで育夫に助けて頂きたいのです。育夫の所に私を置いてくれませんか。其の代り兄の看病は私にさせて頂きたいのです。その位の事だつたら私にもできそうだし又その方が張合があつていいと思ふのです。』最後に『どうかどうか私を助けてください。お願いします。是非お願いします』と結んでいます。結局睦子は田舎に帰つてもあんまり良くなかなかつたので、寝たきりになった暁の面倒を見たいと育夫に頼んだわけですね。その願いが聞き入れられて睦子は暁の面倒を見ることになりました。それを生き甲斐にできたため精神は安定に向かいました。睦子は犠牲になつたというふうに言われて

いるんですが、暁がもし脳溢血に倒れていなかったら逆に睦子の方が死んでいたかもしれないわけです。逆説的なのですが運命の問題と言いますか、そういったものがあると思います。面倒を見ている間もですね、最後の見合いは73年で結婚を考えたのですが、相談した遠い親戚から反対する意見があつたということで、最後は億劫になつてしまったということが『兄の左手』に書かれています。おそらく脳溢血の前にも見合いをしたと思うんですが、それでも、睦子は暁の面倒を見る方が他の人と結婚して世話をするよりも張り合いがあるという、そういう比較をしてしまったのではないかと思われまふ。

(3)「白い屋形船」の執筆補助

「白い屋形船」の執筆過程を取上げます。病院で聞き取つたり原稿判読していったのは嘉久子と、暁と親しかった女性の丸山という方だと長男育夫は言っています。睦子は田舎に帰っていたのでできるはずがない、東京に戻つて来てから清書して文学者瀬沼茂樹と河盛好蔵に見せに行つただけだということです。河盛好蔵はフランス文学者ですが、昨日劇にも河盛、河盛と出てました。あの河盛好蔵は「これはどうか」と言つてあまりよい顔をしなかつたんですが、瀬沼茂樹は「白い屋形船」を評価

して発表できると言ったので、出版社に持って行ったそうです。『白い屋形船』の単行本のあとがきには『私は二年前の十一月から脳溢血で寝込んでゐて、この病後作品は、すべて妹徳廣睦子の筆記である』と書かれています。必ずしも正確ではないということになります。すべて妹がやったということにしたのは、やはり睦子の精神不安定を気づかっていたか、あるいは脳溢血の後遺症でちょっと記憶があいまいになっていたか、どちらかなのではないかと私は考えています。「白い屋形船」以後のものは基本的に睦子がやり、長女がやったのは少数の例外ということです。

(4) 結論 相互依存

羽鳥徹哉という日本文学研究者が97年10月の雑誌にこう書いてるんです、『睦子は、兄という家長のために自己を犠牲にしたとも見られるが、兄の片腕となるあり方が、彼女にとって最良の個性伸張の道だったともみられる。日本的家族が、個人尊重の近代的家族に生まれ変わる産みの苦しみの姿、同時に日本的家族と近代的家族理念との融合の様子を上林暁と徳広家のあり方に見ることが出来る。実際私が話したようなことは、今初めて言ってることなのでこの人は知らないはずなのですけども、洞察力が鋭い人っていうのはいるんですね。大体見抜いていたようです。睦子は

自分の生き方を考えた中で、暁の面倒を見たいという願望を持ったので、単純に犠牲になったとはやはり言えないのではないか。そういうことだったら多分あんなに続けられなかったと思いますね。自分の道だと考えたのではないでしようか。実際途中で結婚を考えてますから、睦子がいなくても他の誰かが見てくれるってことは確実でした。隣にいた長女はもちろんですけど、親しかった女性にもやってもいいという気持ちがあったようです。

また、睦子が暁の執筆や編集、人付き合いに影響を与えた可能性があります。睦子が筆記をしますから、当然その人に対しては変なことを書けない。昔のように「姫鏡台」とか「聖書とアドルム」のようなものは書きづらくなってしまうのは、これは仕方がないことです。

(5) 暁の死後

暁の死後、もうやることがなくなって不安定になるかというところではなくて、その頃は吹っ切れていますし、暁に感化されて文学をやると、82年には『兄の左手』、86年に『手織りの着物』を著述しました。『兄の左手』には本当に自分と暁のことしか書いてないんです。隣の家には長男夫婦や長女の一家がほとんど触れられてない。これはそう悪意があったっていうことではないと思うの

です。自分と兄とのことを書くというテーマからすれば、外れたことをそんなに書かなくもいいだろうということになります。けれども、暁が書いたものを読まずに睦子のだけを読むと、本当に回りにはいなくて広い世界に二人だけで生きてるように見えてしまうという弊害もありまして、永らくそういうふうに全部睦子が面倒を見たというふうに思われがちだったもんですから、まあ今回それに対して否定するわけじゃなくて補足するということで、長男一家と長女一家の話を入れることにしたわけです。

睦子は三年前に天沼の家を、借家でしたので大家に返しまして、現在は都内の老人ホームに居住しております。もう認知症で訳は分からなくなっていますが、私も毎月二度くらい母と一緒に会いに行ってます。行くと私のことが分からなくとも喜んでくれます。

*最後にたくさん貴重な写真を紹介し、講演を終える。
*その後、シャンソンなど数曲をギター片手に熱唱してください。

*一時間半余の講演内容を、講師の許可を得て、事務局で割愛、編集し掲載しています。

訃報

永年上林暁顕彰会理事を務めてこられ、その間、文学館主催の「文学講座」で二度に渡り上林文学について講演下さいました松本秀正氏が、昨年九月二十八日、ご病気にてご逝去されました。

ここに謹んでご冥福をお祈りいたしますとともに、氏の永きにわたる当会へご支援ご協力に對しまして、深く感謝申し上げます。

2017年度文学館の活動から

*劇団「The・創」『びつたれの証（あかし）』演劇公演

～上林暁の生涯～（文学館＆町民大学・共催）

日時 10月7日（土）開演14時半～16時半

会場 黒潮町ふるさと総合センター大ホール

◇10月28日（土）開演14時～16時

高知市「春野文化ホールピアステージ」でも公演

お問い合わせ 上林暁顕彰会事務局（山沖）

TEL 〇八八〇ー四三ー二二一〇